

エントリー名：北島幸三（現：名護市立大宮中学校 前：今帰仁村立今帰仁中学校）

活動名：ギリギリの OUT を目指す生徒会！
挑戦を通して、協働と主体性の意義を掴む！

解決すべき課題：
令和 5 年、コロナの 5 類感染症への引き下げをきっかけに、対話や協働をベースにした授業や、密を過度に恐れない行事への回帰が徐々に始まっていった。しかし 3 年間以上、行事の自粛や縮小が繰り返され、密を避ける行動を強いられてきたため、その時点での生徒会活動はかなり停滞していた。自分達で企画を立ち上げ、**協働して何を成し遂げる経験が圧倒的に不足していた。**

目標：ギリギリの OUT を目指す生徒会活動の推進：
「どうせ自分たちにはできない」という雰囲気蔓延する中で、最初から自分たち自身で忖度して「これくらいまでなら認めてもらえるかな・・・」という立場で企画を提案するのではなく、**あえて「だめ(OUT)」と言われるだろうことでも、やってみたい、やってみる価値があると思ったことは、まずは企画を立ち上げ、提案していく。**OUT と言われた時には、OUT を指摘された部分に関して改善策をたて、再度提案し、企画の実現を目指す。
方針：効率より面倒を選ぶことで、当事者を増やしていく
本人たちの思いだけでは企画の実現は難しい。その企画に対して、自分も「当事者」と思える人間を増やすことが大切。そのためには効率よく進める以上に、細かく計画をたて、手間をかけて人に会い、思いを丁寧に話していくことを重要視する。一見面倒なことほど大切にしていく。
セーフよりもアウトを目指す 効率より面倒を志向する 当事者を創る

活動内容：
1. 小中連携宿泊リーダー研修の企画・実現 (R5. 4～7)
① 執行部が小学校に行き交渉。村内 3 小学校の児童会と夏休みに合同で行う宿泊研修を実現。
② 宿泊研修では小中の縦割り班を組み、野外炊飯も実施する。
③ 夜はキャンプファイヤーを囲んで、小中縦割り班ごとのスタンプ発表会を実施する。
2. 小中連携 生徒会主催講演会の企画・実現 (R5. 10～11)
① 生徒会からペンキ画家の SHOGEN さんに講演を依頼し承諾をもらう。
② 中学校のみでなく、3 小学校でも講演してもらうことを SHOGEN さんと交渉、承諾をもらう。
③ 執行部が 3 小学校に行き交渉。中学校生徒会主催で小学校でも講演会開催の許可をもらう。
④ それぞれの小学校の講演日に中学生が出向いて講師紹介、司会等、講演会の運営を行う。
3. 小学校ペイントイベントの企画・実現 (R5. 12)
① 講演会を受けた一つの小学校が、校内の壁に児童がペイントするイベントの実施を決める。
② イベント当日、生徒会のメンバーが小学校に出向き、準備や片付け等の運営を手伝う。
4. 中学校でのペイントイベントの企画・実現 (R6. 1～7)
① 中学校でもペイントイベントの実施を企画。
② 教職員、教育委員会に企画書を提出し、折衝を繰り返し、許可を得る。
③ SHOGEN さんに連絡し、ペイントアートイベントを生徒会執行部として依頼。承諾をもらう。
④ SHOGEN さんが行うペイントアートイベントとしては、中学校では日本初の実施となる。約 300 人の生徒が一斉に、90 メートル壁 5 段にペンキでペイントを行う。



<https://www.facebook.com/100002568161932/videos/494313716421816/>

取組の過程：
前年度まで修学旅行、野外炊飯、校外の方が関わる行事は自粛の風潮の中で軒並み中止や規模縮小の判断が下されてきた。令和 5 年当初も、5 類に下がったとはいえ同様の雰囲気があった。しかし、その中にあって、生徒たちはいくつもの企画を実現していった。実現のポイントは、
1. 「ギリギリの OUT を目指す」というキーワード
様々な企画が生徒会から運営委員会や職員会議にあげられた。もちろん少なくない案に「OUT」の判断が降り許可されなかった。だが、その際も**「失敗」という捉え方でなく「攻めたね！」**となり、次のギリギリを目指すモチベーションとなった。結果、第 2 案、3 案、4 案と練り直しが行われ、よりブラッシュアップされた形で実施に漕ぎ着ける案も多かった。
2. 小学校を巻き込む
宿泊に関するハードルは高かったが、小学校でも「協働して何かを成し遂げる経験」に対する課題は感じており、何かに取り組みたいという思いがあった。そこに中学校生徒会が企画を持ち込んだ。小学校としては中学校が主体で動いてくれることで取り組み実施へのハードルが下がり、中学校生徒会としては**小学校が乗り気になってくれたことで、許可へのハードルが下がり、実施に向けて具体的に動き出すことが可能になった。**ペイントに関しても小学校がまず動いてくれ、実際に行ってくれたからこそ、「中学校でも、できるはず！」という形が作れた。
3. 地域（村長・教育長・教育委員会）を巻き込む
SHOGEN さんを招聘した時点で、「中学校の壁にみんなでペンキで絵を描きたい」という思いが生徒たちにはあった。その実現に向けできることを出し合った。「みんなに SHOGEN さんを知ってもらうために講演会を開く→ 講演会を開いた小学校でペイントをやってみたいという声上がる→ その実施を受けて中学校でも実施する」という流れを作ろうと話し合った。しかし、もし学校が認めてくれても、行政から壁をペイントする許可がもらえないんじゃないか・・・という懸念があった。そこで事前に管理職からアポを取ってもらい、生徒会の生徒たちが村長室や議会事務局を訪問。予め**村長、教育長、議員さんたちに取組の趣旨説明を行い、講演会への招待も行った。**結果、講演会を通してペイントイベントの取り組みに関して具体的なイメージを持っていたことが、その後の行政からのスムーズな許可に繋がった。
4. 異動が決まる
小学校でのペイントイベント実施を受け、来年度は中学校でも実施しようという機運が高まった。生徒会がその企画書の作成を開始したタイミングで私の次年度の異動が決まった。しかし、その時点で私はもうほぼ必要ないくらい、彼らは成長していた。企画はすぐには通らなかったが、その後も粘り強く 5 回、6 回と企画書の再検討・再提出を経て彼らは中学校でのペイントイベントの実施を勝ち取った。そして令和 6 年 7 月、企画実現の過程で**巻き込んだ方々と協働し、全校生徒役 300 名、職員、村長も含めた地域の方も参加したペイントイベントを成功させた。**

活動の成果：それまでが「どうせできない」に溢れた学校生活であった。だからこそ、あえて自分達じゃ**「できない」と思うことに挑戦させたかった。**実際、彼らは時に跳ね返されながらも、それでも数多くのことに挑戦した。その挑戦の中で、彼らは主体的に動くことの意味を深く考え、その大切さを実感の中に落とし込んでいった。ペイントイベント、私は異動して参加はしていないが、取り組み後に SHOGEN さんから直接こんな話を聞いた。ある女の子が絵を描きながら、**「生きてる！わたし、生きてる」**って涙ぐみながら呟く姿があったことを。ある男の子が「学校の壁にペンキなんて塗ったら叱られるのに、それをうちの先生はさせてくれるんだ！」って得意そうに伝えにきたことを。先生方が生徒と共に、嬉々として描いていた姿のことを。その後、生徒の感想文を共有させてもらった。もちろん、全部が彼らの思い通りになったわけではない。それでも**まずは動いて、周りを巻き込み、協働して目標の実現に向かっていく、その過程の中でこそ得られるものがある、そのことを多くの生徒たちが実感している、彼らの感想は、そう感じ取れるもので溢れていた。**